

アオキ胡蝶の如く、烈火舞う

扇町グロシア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

譲られた勝利に価値はなく。

切り結ぶ相手にこそ絆を感じて。

ただ、真つ直ぐに。

命の限り、好き勝手に。

アオキ胡蝶の如く、
烈火舞う

目次

アオキ胡蝶の如く、烈火舞う

なにか切っ掛けがあれば、とは思っていた。

でも、それがどうにも上手くいかなくて。何処かで背中を押されるような事さえあつてくれれば、思いを打ち明けられたのに。

私たちは、仲良くなりすぎてしまったから。

もし私が猪股家へ行つて、「息子さんを私にください」と言ったら。本人はスゴく嫌な顔をするだろうけど、ご両親は快諾してくれるだろう。

それくらい私たちは近くて、同居している千夏先輩と同じくらいに親くて。

問題は、たつた一つだ。大喜は、千夏先輩しか見ていないということ。下手をしたら、私が女子だとすら認識してないかもしれないくらいに。

千夏先輩がもし大喜を手に入れようとしたなら、私はどうにもならない。勝ち目は寸毫も無いし、そして更に。私は千夏先輩が、嫌いではない。尊敬できる先輩だし、大切な友人でもある。だから二人が結ばれたなら、私はきつと心の底から祝福するだろう。してしまうだろう。

だから、私は。大喜の言葉を聞いて、どう反応していいかわからなかった。

「俺と距離が縮まるのは、よくないことらしいから。そう言われたら、どうしていいかわからなくて」

——千夏先輩は、そんな事を大喜に言ったのか。

大喜との間に、線を引いた。そこを越えない、越えさせないと言った。

ならば。私は喜ぶべきだ。ライバルが勝手に退いたのだから、隙を突くべきだ。

そう、思うのに。私は、動けなくなつた。二人が険悪になつて欲しくない、大切な友人同士は仲良くあつて欲しい。それもまた、本心だから。

私は、どうすればいいんだろう。それこそ、どうしていいかわからない。

心が、また澱んでいく。

身体を解せば多少はマシになるから、今日も整体院へと向かう。身体のメンテナンスをしておけば、心も回復してくるから不思議だ。

……千夏先輩もよく来るから、必然的に顔を合わせることになるけど。

「蝶野さん、今日もオーバーホール？」

「あ、千夏先輩。そうなんですよ、暑くなると頻繁にメンテしないと」
この時期大変ですよー、と千夏先輩に冗談を返しつつ。ふと、思ってしまう。

この人の真意を、知りたい。

「……千夏先輩。大喜、なにかあったんですか？」

空気を読めないウザ後輩モードで、一步踏み込む。

そしてかわせないように、もう一步。

「なんか夏休みなのに、テンション低いって言うか。あのバカ毎年受かれてるのに、今年に限ってああなんですよねー」

何も知らない風に、あくまで好奇心を装って。

さて、どう返ってくるか。と思う暇も、無かった。

「私が色々、振り回しちゃったから……ね」

少しだけ、哀しそうな声で。千夏先輩は、短くそう言った。

「私はもっと居候として、ちゃんと線引きするべきだったんだよ。大喜くんは勘違いさせて、さ。これからは、気を付けるから」

——それは、違わないか。大喜が千夏先輩に向けた感情は、只の勘違いだったというのか。

じゃあ私は、何と戦っていたんだ。

大喜が千夏先輩を好きじゃないとしたら、私は何に負けていたんだ。

「大丈夫、大喜ちゃんと蝶野さんはお似合いだから。これからは、ちゃんと応援するよ」

……何を言っているんだ。

この私を、誰だと思っているんだ。
無敵の蝶野雛を、舐めるな。

勝手に退いて、勝手にそんな事を言い出して。

不戦勝を喜ぶほど、小物に見えるのか。

この、私が。

「じゃあ先輩は、大喜を嫌いになってくれますか。大喜に嫌いだと、そう言ってくれますか」

口から憎しみが溢れ、刺を纏う。

相手が誰であろうと、知ったことか。私を怒らせたんだ。

「嫌いでは、ないよ。ただ私の立場だとね……」

「立場があるから譲ってあげる、あとは宜しく、って？ いい加減にし

てくださいよ、馬鹿馬鹿しい」

人目もある、声を上げたくはない。

でも、耐えられない。

この女の言い分は、許さない。

「大喜を弄んで、私を憐れんで。さぞ気分が良いでしょうね、悲劇のヒロインぶるのは」

「あの、違う……よ。私は居候で、義理もあってね……」

それは、口実じゃないか。居候だから、好きだけと身を引くなんて。

「じゃあ、大喜の気持ちはどうなるんですか。あのバカ、中学の頃からずっと、……千夏先輩が好きですよ。バカで単純でバカでヘタレな大バカ野郎だけど、必死で千夏先輩と釣り合うようになろうとしているんですよ」

私はそれを、側で見してきた。私の事を思って欲しい、と悔しい気持ちを押し殺して。

大喜が努力し、挫折し、立ち直ってまた努力して。その姿が、私を支えてくれた。

それもこれも何もかも、只の錯覚だと言うのか。家に知らない女子が住むようになって、それで興奮していただけだと言うのか。

私を、そして大喜を。舐めるな。

「勝手に引かないでくださいよ。私は、貴女に正面から勝たないとい

けないんです。不戦勝なんて、死んでも認めません」

「そうだ、私は大喜が好きだし千夏先輩も好きだ。ベクトルが違うだけ。」

大喜が欲しい。千夏先輩に勝ちたい。それが私の、両輪だから。ようやく、そこに気が付いた。

「……そもそも、千夏先輩は鈍すぎるんですよ。私じゃなくて、大喜の気持ちに気付いてあげてくださいよ」

もし本当に気づいていたら、私はとつくに負けているけど。

「先輩は、もつと他人に期待してください。我儘言っただって、大体は赦されますよ。だって私たちは、子供なんですから」

私だって、もつと我儘をぶつけない。こんな風に千夏先輩を焚き付けるより、大喜を手に入れたい。それも私の気持ちだ、矛盾はあっても嘘じゃない。

子供の我儘を、ぶつけ合えばいい。私たちなんて、そんなもんだ。

「先輩が大喜を好きなら、それで良いじゃないですか。私も大喜が好きです。誰に何を言われようと、曲げる気も引く気もありません。千夏先輩だって、そうじゃないんですか」

ああ、バカだな私は。千夏先輩が本気を出してきたら、その日の内に決着が付きかねないのに。

でも、だ。

敵は強ければ強いほど良い。戦って戦って、真っ白な灰も残らないほど戦って。そして――。

「私は、必ず勝ちます」

大喜に先輩じゃなく、私を好きにさせてみせる。この私に、敗北はない。

千夏先輩に、宣戦を布告して。夏の風が吹き抜けていく街を、一人で歩く帰り道。

夏休みに入って、まだ日は浅い。でもこの夏は、忙しくなるだろう。

これから千夏先輩は、私の敵だ。だから敬意を払って、正々堂々と戦おう。

私は、負けない。

私は、無敵だ。
蝶野雛を、舐めるな。